

〔資料紹介〕 荒木田末偶宛本居宣長新出書簡

神 谷 勝 広

一 宣長と外宮論争

本居宣長（1730～1801）は、伊勢神宮の外宮祭神「豊受大神」の神格を明確にしたいと考え続け、晩年『伊勢二宮さき竹の弁』（寛政十年〔1798〕成、享和元年〔1801〕刊）もまとめている。今回紹介する荒木田末偶（あらかだすえとも）宛宣長新出書簡（神谷蔵、軸装、元々の書簡を適宜裁断し二段にする、縦三十・五糎、横四十一・五糎、図版参照）は、外宮をめぐる議論に関わるが、意外な内容を含んでいた。

二 新出書簡

末偶（1735～1801）は、姓菊屋（菊家）、通称兵部、内宮権禰宜を勤め、天明四年（1784）宣長に入門する。したがっ

て当該書簡は師弟間のものだが、単純に師が弟子へ自説を教えているわけではなかった。適宜句読点等を施しつつ翻字し次に示す。

一筆致_レ啓上_二候、時分柄次第

寒冷に相成申候處、其御地

貴家并御社中愈御安全

御座被_レ成候哉承度奉_レ存候、愚老

無事罷在候、乍_二慮外_一御安意

可_レ被_レ下候

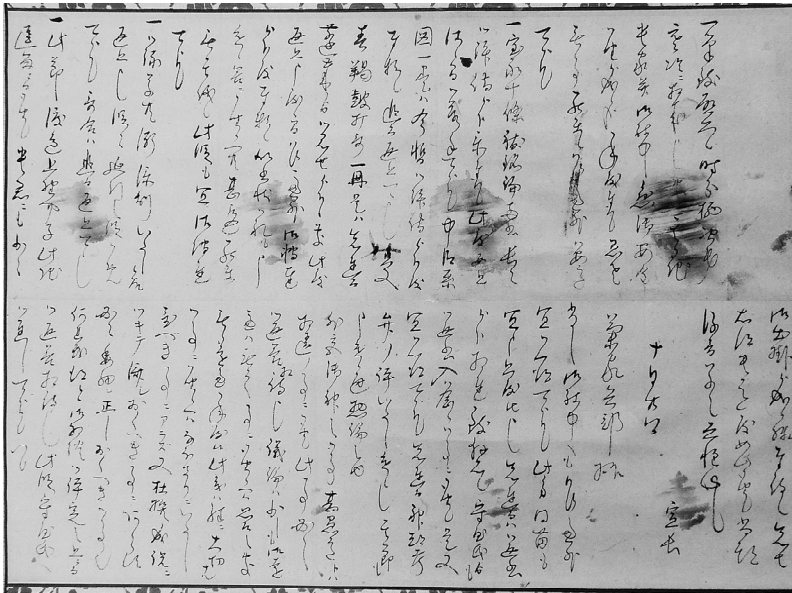
一、宝永十條、祓銘論両書、長々

御許借被_レ下忝奉_レ存候、此度返上

仕候間、御落手可_レ被_レ下候、中臣系

図一卷は今暫御許借被_レ下度

奉_レ頼候、追而返上可_レ申候、且又



〔資料紹介〕 荒木田末偶宛本居宣長新出書簡

春羯鼓打歌一冊、是は先達而

蓬萊より御見せ被_レ下候處、此度

返上申度候間、乍_ニ慮外_一御伝達

被_レ下度奉_レ頼候、以_ニ書状_一御礼も申

進候筈に御座候へ共、甚取込罷在

無_ニ其儀_一候、此段も宜御伝達

可_レ被_レ下候

一、御詠草共漸添削いたし候故、

返上申候、段々延引の段御免

可_レ被_レ下候、歌合は追而返上可_レ申候

一、此節、渡边上野介子此地

逗留に而御座候、貴君にも少々

御出掛被_レ成候様奉_レ待候、先は

右得_ニ貴意度_一、如此御座候、尚期_ニ

後音、早々、恐惶謹言

宣長

十月廿八日

菊家兵部様

尚々御社中へも、乍_ニ慮外_一

宜御心得可_レ被_レ下候、此方同苗も

〔資料紹介〕 荒木田末偶宛本居宣長新出書簡

宜申上度由申候、先達而は御返書

被_レ下、相達致_二拜見_一候、守屋氏よりも

御返書入_二御念_一候御事に御座候、是又

宜御心得可_レ被_レ下候、先達而神都考

弁の評いたし進申候、其節も

中進候通、惣論の内、

外宮御神の御事、甚愚意とは

相達の事に御座候、此事必々

御返答相待申候、議論は少しも御遠

慮は無_レ之事に御座候へは、思召の處

無_二御遠慮_一承度候、此義は殊に大切なる

御事に御座候へは、なほさりにいたし

置べき事にあらず、又杜撰成説に

つきて済しおくへき事にあらず、

必々委細に正しおくへき御事也、

何れも得と御相談御評定の上に而、

御返答相待申候、此度守屋氏へ

御達し可_レ被_レ下候、以上

主な書名・人名につき、略注を付す。

○宝永十條

度会延貞著。宝永六年（1709）成、外宮

○祓銘論

の祭神を国常立尊とするので、宣長の主張とは異なる。

『両宮御祓銘論記』。伊勢両宮についての諸論を集録。寛文十年（1670）～十二年に成立。

○中臣系図

大中臣本系帳とも。

○蓬萊

荒木田尚賢（1739～1788）。蓬萊尚賢とも。内宮禰宜兼副大物忌、天明七年宣長に入門。

○渡辺上野介

渡辺重名（1759～1830）。豊前国の人。天明六年に「上野介」。同七年宣長に入門。同十一月、松坂での歌会に参加。

○守屋氏

磯部昌綱（1747～1815）、通称守屋徳大夫。伊勢渡会郡宇治の人。安永六年宣長に入門。

○神都考弁の評

磯部（守屋）昌綱『神都考僻説弁』（安永二年）を宣長が批評した『磯部主へ送ル総論』のこと。

書簡内容から、次のような推測ができる。

・宣長『磯部主へ送ル総論』は、年次不明で「九月」とのみわ

かっていたが、当該書簡直前の「九月」と思われること。

- ・渡辺上野介が松坂に来ているので、当該書簡の年代は天明七年頃と思われること。

- ・新出書簡の年代が確定し関連資料が見いだせれば、論争の展開が把握しやすくなること。

改めて関連資料を探索したところ、複数のものが見出せた。

三 論争の進捗

関連書簡三通と『磯部主へ送ル総論』『伊勢二宮さき竹の弁』を時系列に並べ、外宮論争の進捗を確かめていく。なお引用は、『本居宣長全集』（筑摩書店）に依拠した。

A、天明六年十二月十九日付荒木田尚賢宛宣長書簡、

…先頃ハ菊家氏数日逗留被_レ致、日々面会大悦仕候、殊外出精二而大慶仕候…

天明六年十二月に、宣長と末偶は、じっくり話し込むことがあった。

B、天明七年四月十日付末偶宛宣長書簡、

去月廿四日之御状早速相達…

一、昌綱主神都考説弁御見せ、先ざつと一返閱見仕候、扱々面

白御事二御座候、尚跡より委細御答可_レ申候…

一、大中臣本系帳 宝永十條 祓銘論

右三書御所藏御座候ハハ、御許借被_レ下度奉_レ希候…

『神都考説弁』は『神都考僻説弁』のこと。末偶が宣長に同書を見せ、その後、『宝永十條』『祓銘論』も貸す。当初、宣長は手元に論争のための関連文献も揃えていなかったことがうかがえる。そして、宣長は「跡より委細御答」すると述べる。つまり、末偶の方から、議論を望み、宣長の考えを引き出そうとしているのである。

C、天明七年八月二十一日付磯部昌綱宛宣長書簡、

…神都考説弁御述作被_レ成、是又菊家主より拝見仕、甚以御尤之御評論共、感心いたし候御事二御座候、右愚意存寄り書加へ申候様、致_二承知_一罷在候、近来殊外多用二而、いまた熱看も不_レ仕候、何様近内得と拝見仕、愚存書加へ返上可_レ申候…菊家主御同伴にて少々此方へも御出呉々奉_レ待候…

宣長は、この段階で磯部本人へ連絡を取り、「感心いたし候」としつつも、実のところ「いまだ熱看」していない。この後、宣長は「得と拝見仕、愚存書加へ返上」する。すなわち、これが『磯部主へ送ル総論』だった。

D、九月成『磯部主へ送ル総論』総論、

○外宮五部書ハ、中コロ天下文盲ナリシ世ノ偽作ナル…

○吉見ハ才識アル男…又此男一向二古意ヲワキマヘズ…

○神都考僻説弁ハ、マコトニヨク弁シ玉ヘリ、但シ凡テノサマ、

カノ吉見ガ口ツキヲナラヒ玉ヘリト見エテ、敵ヲ破スル詞ア
マリスルドク、実ニ過タル事多シ……

尾張の神道者吉見幸和が、元文五年（1740）に『神道五部書説
弁』を著し、外宮の祭神を臣列膳部の神としたが、外宮の神官橋村
正身が『開国神都考』を著述し反論した。これに対して、磯部は
『神都考僻説弁』を書き、吉見を支持し、橋本を論破しようとした。
宣長は、磯部に対して「敵ヲ破スル詞アマリスルドク」と批判し、
議論は「古意」をわきまえるべきだとする。

E、『磯部主ヘ送ル総論』総論後書、

…愚老か存念如_レ此候也、能々御勘弁被_レ成、尚又傍之識者達ヘ
も被_二仰合_一て、愚老か申所尤候歟、又ハ尚も御論弁有バ、い
さ、かも無_二御遠慮_一、委細御存念之通を御返答可_レ被_レ成也、惣
而議論ハ、御互ニ学問之励ニ相成候事ニ候ヘハ、少しも〳〵御
遠慮有_レ之間敷御事也、夫故愚老も憚をかへり見す、存念之
ま、申候事也、返々も御遠慮なく、御論弁之御返答承度御事ニ
候也、穴可畏

ようやく、宣長は「遠慮」なく議論を戦わす気持ちになっている。
宣長のいう「傍之識者達」の中心は、末偶であろう。右の書簡に続
いて末偶へ出された書簡が今回の新出書簡であった。改めて新出書
簡の尚々書を示す。

F、推定天明七年十月二十八日付末偶宛新出書簡尚々書、

…惣論の内、外宮御神の御事、甚愚意とは相違の事に御座候、
此事必々御返答相待申候、議論は少しも御遠慮は無_レ之事に御
座候へは、思召の處無_二御遠慮_一承度候、此義は殊に大切な御
事に御座候へは、なほさりにいたし置べき事にあらず、又杜撰
成説につきて済しおくへき事にあらず、必々委細に正しおくへ
き御事也、何れも得と御相談御評定の上に而、御返答相待申候、
此度守屋氏へ御達し可_レ被_レ下候、以上

宣長は、一層積極的になり、議論へのめり込んでいる。宣長が末偶
に「得と御相談御評定」というのは、末偶が単なる仲介者ではなく
当事者であったことを示している。

G、天明八年三月十三日付末偶宛宣長書簡、

正月廿九日、二月廿五日両度之御状、是節届致_二拜見_一候……
一、神都考弁ノ再論、御出来次第拜見いたし度候
論争は末偶も加わりながら、さらに続いている。

H、宣長『伊勢二宮さき竹の弁』（寛政十年〔1798〕成、享
和元年〔1801〕刊）

そして最終的に、右書をまとめあげることとなる。

四 末偶の役割をどう見るのか

末偶は、論争のきっかけを作り、宣長に関連文献も貸し出し、磯部との間を取り持ちつつ、議論に加わっている。一方、宣長は、実は、当初自発的に論争を起こそうとしていない。だが、次第に論争へのめり込んでいく。論争を経たことで、宣長は『伊勢二宮さき竹の弁』をまとめあげられたともいえる。

外宮論争が始まった同時期、宣長は、上田秋成（1734～1809）との間で、いわゆる『呵刈蔑』論争を繰り広げている。宣長『呵刈蔑』二巻は、古代日本語の音韻に関する「上田秋成論難同弁」を上巻、『鉗狂人』に関わる「鉗狂人上田秋成評同弁」を下巻とする。二つの事柄は本来無関係だが、秋成にからむことから一つにまとめられた。

末偶は、この二つの論争にも関与している。田中康二氏『本居宣長——文学と思想の巨人——』（中央公論新社、2014年）が、事の経緯を整理しているので引用する。「上田秋成論難同弁」について、

都合二度の応酬が行われたことがわかっている。これは天明六年（一七八六）から翌年にかけて行われたと推定される。事の発端は、秋成と親交があり、天明四年に宣長に入門した菊屋兵

部（荒田木田末偶、一七三五～一八〇二）が、宣長の国語研究に対して秋成が論難したものを宣長に寄越したことに始まる。

とし、『鉗狂人上田秋成評同弁』についても、

これは宣長が藤貞幹『衝口発』を論駁して記した『鉗狂人』に対して秋成がコメントを付し、それを宣長が論弁したものである。つまり、『鉗狂人』論争の続きである。やはり天明六年頃に成立したものとされる。秋成の書簡が菊屋兵部を通じて宣長に届けられ、これを宣長が批評した：とする。

以上のことを踏まえて、神谷は末偶の役割を従来よりも重く見たい。天明六年頃、末偶は宣長に次々と議論を持ちかけ、宣長を論争へと駆り立てた。その結果、宣長の学問は論争を経て一層磨きがかかった。このように考えられないだろうか。